

ありがとう

阿部 毅正

横浜駅西口の地下道から快晴の天理ビル前に出ると、朝七時前なのに沢山の人がそれぞれ目的のバスを待っていました。人波をぬって三〇四人のバスツアーのガイドさんが小旗やボードを掲げて顔に汗を浮かべ、案内をしていました。



筆者

「横浜善光寺」の小旗を背中に、檀家総代である東郷さんがメモを片手に待っていてくれました。東郷さんの顔を見て「ほっ」としたのは、私だけではないでしょう。

七月二十三日に行われた善光寺主催の「大田山光真寺地藏尊夏大祭と那須高原」の日帰りバス旅行に、初めて参加させて頂きました。気になっていた参加者数を聞いたところ、三十九名すべて大人とのことでした。

九十一歳とは思えない、かくしゃくとした檀家総代の熊谷さんと東郷さんから、一五四五年建立の光真寺の歴史等を含めた含蓄のある話を聞き、相鉄バスガイドの「羽田空港で今、工事している管制塔は完成しなければ管制塔でない」等、車外の案内を聞いているうちに光真寺に着。

大田原城主の家紋の入った山門、副住職や大勢の檀家に出迎えられました。しばし大広間で、

朝獲りのなすときゆうりのおいしい漬物でバスに揺られた体を休めました。その後、巡礼装束に身を固めた檀家の金剛杖の鈴の音に先導され、小袋に入れられた四国八十八霊場の砂を踏み締めて、本堂でのご祈祷に向かいました。

赤々と燃えあがる護摩の炎を目の前に般若心経を唱え、住職さんに身を清めていただきました。帰りにも住職さんはじめ、大勢の方々の見送を受け、気持ちよく光真寺をあとにしました。

那須高原「お菓子の城」で昼食後、温泉入浴組と観光組とに分かれ、私は殺生石を見たあと、温泉神社で足湯を味わうことができました。

さて、今日の旅行は、成寿山善光寺創建三十九年目であり、参加者も三十九名。そして四国巡礼三十九番札所、土佐半田村寺山延光寺の砂も踏むことができました。楽しかった旅行、「サンキュー」でした。

光真寺参詣に参加して

羽部奈緒子

そろそろ会社の有給を消化しなくては、と思っていた丁度その折、母に誘われたのが今回参加させていただいた日帰り旅行です。

光真寺は、今なお懐かしい先代方丈様のご実家だと以前から聞いてはおりましたが、私と母は今回が初めての参詣でした。

当日の朝、普段ならまだ寝ている時間に集合場所へ行き、「少し早めの夏休みだぞ」と、どこかうきうきした気持ちでバスに乗り込みました。

学生時代をキリスト教の学校で過ごし、二年前に祖父が亡くなるまで家に仏壇もなかった私にとつて、「お寺の参詣」と言えば今までは鎌倉や京都への観光を指していました。

光真寺に着いて、まず振る舞っていただいたとれたて野菜のお漬物。和気あいあいとそれを頂きながら、田舎に遊びに来たような不思議な感覚から抜けられません。

こちら私、これからお寺へお参りをするんだぞと思っても、厳粛な気持ちはどこへやら。般若心経を手に正座をしても、むしろ少し懐かしいような気持ちでした。まるで、学生時代に毎日当たり前に学校のチャペルへ行き、礼拝に臨んでいた時のような。

言葉としては知っていましたが、そのあと始まった「護摩焚き」は想像を超えて圧巻でした。百聞は一見にしかず、とはまさにこのこと。

パチパチと火がはげ、お経がバタバタとはためき、般若心経を幾度も唱和する声が響き、混じり合って、お堂に満ちていました。

そこは、懐かしいような日常と飲み込まれそうな非日常の混在した綺麗で厳かな、とても不



向かって左が筆者

可思議な空間でした。

仏教について、お寺について、難しいことは分かりません。しかしお仏壇に毎朝手を合わせたり、折々に墓参りをしたりする当たり前のことのその先に、何かがあるのかなと思いました。

それはすぐに答えの出る明確なものではありませんが、今後お寺で手を合わせる時に、観光気分や「型どおりの厳肅さ」とは違った何かを感じられるのではないかと思っています。

今回、何の知識もないまま参加させていただきましたが、このような機会にお誘い頂いて本当にありがとうございました。

また次の機会にお誘い頂けることを期待しつつ、少し仏教について勉強しようと心に誓った若輩者でございます。



大田山光真寺旅行記

大野 孝雄

平成二十年七月二十三日、バスにて東北自動車道を一路北上し、到着した大田山光真寺は、大野家の菩提寺でもある。栃木県北部那須の原の麓に開かれた大田原は、昔は寒村であり、その「仲町」という所で小児科の開業医を営んでいた父はよく光真寺に呼ばれ、往診に行つては、診療後真つ直ぐ病院に帰らず、お酒などをご馳走になっていたようであった。後年、私が先代方丈から食事によばれることが多いのは、この親同士の因縁かもしれない。

光真寺は、大田原城主の菩提寺であり、小さな町の文化の発信源でもある。

夏。町内の各所で行われる盆踊りは、地元の



筆者

人の楽しみの一つでもあるが、夏の夜のメインイベントは、光真寺で開催される「地藏尊百丈祭千燈供養」である。光真寺の長い渡り廊下一杯に蝋燭が灯され、それが「千燈」の意味であ

るが、外界の闇の中にゆれ動く光の数々。そこに幻想的な世界が出現し、子供心にもあの世はかくもありなんと思ひ浮かべたものであった。

この日、本堂に座し、三十七世俊雄老師の読経に唱和していると、何処からともなく「おい、大野。どうしている。俺は、善光寺の基礎を強固に築いたつもりだ。檀家三千余名のお寺をつくり上げたが、少し早く走り過ぎたかも知れない。まだまだやりたいことが山ほどあり、このまま逝ってたまるかとの無念の情、溢れていたが、いま博志の成長振りを見るに、これでよかったのかも知れないという思いだ。これも現世の宿命か」、懐かしい声が聞こえてきた。

「方丈。博志は、お前の自慢の息子だけあって立派に成長。事業をきちんと踏襲、順調に発展させている。今回日帰り旅行もその一つだ。まあ見ていてくれ」。読経が終わり本堂を出ると油蟬が一斉に鳴き出したのであった。

